

フランス語接続詞の意味とニュアンス¹⁾

石野好一

Résumé

Cet article a pour but de réfléchir sur les sens et les nuances de conjonctions polysémiques du français du point de vue de l'acte de parole. De ce point de vue, chaque conjonction de coordination traditionnelle a non seulement un caractère coordinatif mais aussi subordinatif, tandis que chaque conjonction de subordination traditionnelle a également ces deux caractères. Pour distinguer ces différents emplois, nous adoptons ici les terminologies suivantes : coordination (ou structure coordinative) et phrases liée (ou structure liée), en référence à des auteurs comme Bally, Ducrot, Charolles, etc.

Pour analyser les deux phrases d'une conjonction, nous examinons les possibilités d'inversion, de focalisation, etc. L'examen des possibilités d'inversion nous montre que, tandis que les phrases liées peuvent être inversées, celles qui sont coordonnées ne le peuvent pas. L'examen de focalisation avec « c'est... que » rend apparent le fait que seules les structures liées peuvent employer cette construction pour focaliser la proposition conjonctive. Ce genre d'examens met en évidence la relative indépendance des deux propositions d'une structure coordinative contenant deux actes de parole et la dépendance intime entre les propositions dans une phrase liée qui contient un seul acte.

Avec ces examens, nous avons tenté d'analyser la relation entre différents sens de la conjonction « si » et leurs caractères conjonctifs. Nous avons démontré que les sens de condition et de supposition de « si » ont un caractère de « phrase liée » alors que les sens de contraste, d'opposition et de concession présentent des caractères de coordination. Ainsi, les nuances et les sens d'une conjonction reflètent bien les différents degrés d'intimité entre les propositions²⁾.

0. はじめに

本論文は、伝統的な接続詞の分類の問題点を指摘し、それに対する近年の発話行為の観点からの新たな捉え方をもとに、多義的接続詞の意味とニュアンスを考察したものである。

1. 接続詞の分類

2つの文（または節）の接続関係として、伝統的に3種類の文法範疇が認められている。すなわち、並置 *juxtaposition*、等位 *coordination*³⁾、従位 *subordination*⁴⁾ である (Molinié, 1991, p. 105)。

しかしながら、等位と従位とを区別するための形式的な基準がフランス語にはなく (Pottier, 1962) (Hobaek Haff (=以下 HH), 1987, p. 21)、等位と従位の間に堅固な仕切がない (Lorian, 1970) (HH, 同, p. 26) といった指摘がなされることがある⁵⁾。

また、等位と従位を一つの類にまとめる考え方もあった (Mounin, 1974) (HH, 同, p. 34)⁶⁾。

とはいえ、伝統的研究や構造主義的研究において、等位接続詞・従位接続詞が一般的にどのような統語的・機能的性質をもっているのかをひと通りまとめてみることはむだではない。以下に、まとめてみよう。

1.1. 等位接続詞／従位接続詞——伝統的・統語的・機能的な観点から (まとめ)

1.1.1. 等位接続詞の一般的な性質

①節の倒置が不可能である。(A *et* B → **et* B, A)⁷⁾

ただし、要素同士の倒置可能なものはある。(A *et* B → B *et* A)

②時制の制約(呼応)が少ない。直説法〔または条件法〕が普通で、接続法が要求されることはまずない。また、同じ時制を並べることが多い。

(1) *Je me suis levé à 7 h et j'ai fait du jogging.* (複合過去 *et* 複合過去)

呼応する場合は、先行する節を基準とする前方照応的 *anaphorique* な呼応になり、後節を基準とする後方照応的 *cataphorique* な呼応は行わない。

(2) *Il a cassé un verre et (en fait) il l'avait fait par lui-même.*

(複合過去 *et* 大過去)

(3) *?Je m'étais levé à 7 h et j'ai fait du jogging.* (大過去 *et* 複合過去)

④代名詞は前方照応(先行する名詞を指示)が普通である.

(4) *Jean regarde la télé, et il mange toujours quelque chose.* (il = Jean)

後方照応(後出の名詞を指示)はしない.

(5) *Il regarde la télé, et Jean mange toujours quelque chose.* (il ≠ Jean)

④繰り返しは同じ接続詞で行う. とくに *et, ou, ni* などの場合.

(6) ... *et ... et ... et ...*,

(7) ... *ou ... ou ... ou ...*

または *et* で代替する. *car, or, donc, mais* などの場合.

(8) ..., *car ... et ...*,

(9) *..., *car ... et que...*

1.1.2. 従位接続詞の一般的な性質

①節の倒置が可能である. (*A quand B* → *Quand B, A*)

②時制の制約(呼応)が多い. 時制の一致, 叙法の呼応があり, 前方・後方どちらの照応もある. (*Quand* 複合過去, 半過去/*Quand* 大過去, 複合過去など)

(10) *S'il faisait beau, nous irions à la montagne.*

(直説法半過去—条件法現在) ……前方照応的

(11) *Quand il s'était levé, il faisait du jogging.* (習慣) (前後関係)

(大過去—半過去) ……後方照応的

(12) *Bien qu'il ait fait un verre, il l'a cassé.* (接続法, 前後関係)

接続法を要求する接続詞は, *avant que, bien que* など少なくない.

③代名詞は前方照応, 後方照応が可能である.

(13) *Quand Jean regarde la télé, il mange toujours quelque chose.*

(il = Jean) ……前方照応的 *anaphorique*

(14) *Quand il regarde la télé, Jean mange toujours quelque chose.*

(il = Jean) ……後方照応的 *cataphorique*

④繰り返しは (*et*) *que* で行う.

- (15) Si ... et que ... (接続法), ~
- (16) Quand ... et que ... (直説法), ~
- (17) Parce que ... et que ... (直説法), ~

1.2. 等位接続詞のリストの不均質性 (Soutet, 1989, pp. 87-88)

Soutet は7つの等位接続詞が統語機能的観点から均質ではないことを指摘する。

まず *donc* が他と違い、節の接続に際し、常に先頭におかれるとは限らない。

- (18) Pierre est malade ; il sera *donc* absent. (Soutet, 同, p. 88)

また、*donc* は *et*, *mais*, *ni* と共起することができるが、他の6接続詞は互いに共起できない。このことから、*donc* はむしろ副詞に分類すべきかもしれない。

等位接続される単位は本来同じ統語機能のものであるはずだが、かならずしもそうっていない。この点から、残りの6接続詞は3つのクラスに分けられる。

et, *ou*, *ni* は最も広い受容性があり、名詞、形容詞、副詞、述語、句、節、文を接続する。*mais* は名詞を接続できない (**les hommes mais les femmes*)。or, *car* は節と文しか接続できない。

名詞句などの等位接続は、節の等位接続という深層構造から派生されるという考え方がある (Tesnière, 1965など)。しかし *ni*, *ou*, *et* に関しては、明らかに困難である (*deux et deux font quatre* ← **deux font quatre et deux font quatre*)。

1.3. 従位接続詞の不均質性・問題点

従位接続詞の数は多く、100以上という (Gadet, 1992, p. 98)。そのほとんどが *que* を含む接続詞句 (*afin que*, *si bien que*, *étant donné que* など) で、単純な接続詞は *que*, *si*, *comme*, *quand* の4つだけである (同上)。この形式的類似が、これまで従位接続詞をまとめる根拠になってきたのかもしれない。しかしながら、これら100以上の接続詞は、その用法の点から、決して均質とはいえない。

例えば、従位接続詞が等位接続の意味を持つ“*subordination de sens coordonnant*”として、*quoique* が句点 *point* や読点 *point-virgule* な後に節を導くとき等位接続語の可能性があることが指摘されている (Bonnard) (HH, 同, p. 20)。

- (19) J'aimerais mieux cent fois que ce soit une fille pauvre. *Quoique* vraiment ce n'est pas tout à fait ce que j'avais rêvé pour toi. (Tr. Bernard) (Bonnard) (HH, 同, p. 20)

これだけでなく、伝統的な従位接続詞が等位的な性質を持っていることはしばしば指摘されている。Mounin (1974, pp. 202–203) は、等位的用法の可能性のある従位接続詞・副詞句として、次のものを挙げている。

parce que, puisque, quoique, bien que, puis, cependant, en effet, soit [...] soit [...], du moment que, dès l'instant que, dès lors que など。

例えば、*parce que, puisque, quoique, bien que* などは、次のように、述部、動詞または属詞形容詞を結ぶとき、しばしば古典的な等位接続詞のように働き、等位接続詞と置換可能となる⁸⁾。

(20) Je dors *puisque* je rêve.

(21) Je suis libre *quoique* discipliné.

また、§1.1.2. で、従位接続詞の繰り返しには“*et que*”が用いられることが多いと述べたが、*que* なしの例が見られることがある (Gadet, 1992, p. 93)。

(22) quand le tuyau il crève *et ça* pisse partout. (同上)

2. 語用論的発話行為的アプローチ

以上のような伝統的な等位／従位接続詞の分類法の非一貫性から、何人かの研究者は、接続関係を発話行為の観点でとらえ直し、異なる分類方法をとなえた。

2.1. 等位／連結 (Bally), 意味的等位／意味的従位 (Ducrot)

Bally は、早くからこの問題をとらえ、文の接続の仕方から、等位文と連結文という分類法を立てた (1932, 1965, p. 55)。

等位文 *phrase coordonnée* は、2つの発話 *énonciations* A, B において、A が独立命題であり、B が A を話題 *thème* として捉えている接続関係である。すなわち、「A-B」が「話題 *thème* - 題述 *propos*」の関係になっている (同上)。この関係は意味的等位 *coordination sémantique* であり (Ducrot, 1978)、この場合、

接続詞はあってもなくてもよく、従位接続詞でもよい (Ducrot, 1972, pp. 117-127). 発話者が2つの区別すべき発話行為を続けて遂行している (Charolles, 1990, p. 152) だけであり、節同士の緊密度は希薄である. 例 (23) 参照.

(23) Il fait beau ; ja vais sortir. (Bally)

連結文 *phrase liée* は、2つの節がそれぞれ全く独自に理解できるような発話行為の対象とならない (Bally, 同上) (Ducrot, 同上). 意味的従位 *subordination sémantique* (Ducrot, 1978) の関係にあり、(発話 *p R q* において) 発話者は、*p* や *q* を断定しているのではなく、関係 *R* を主張している (Charolles, 同上). そのため、節同士の緊密度が高い. 例 (24) 参照.

(24) Quand on veut, on peut. (Bally)

2.2. connecteurs / opérateurs (Ducrot et al.) (Charolles)

Ducrot et al. (1975) および Charolles (1990) は、connecteurs / opérateurs という対立概念を用いて、等位構造 *constructions coordonnées* / 連結構造 *constructions liées* を精査する方法を唱えた⁹⁾.

connecteurs は、発話間の等位構造を確立するような表現 *C* のクラスをさす. opérateurs は、連結構造を確立できる *C* 表現のクラスであり、文法的に区別される2つの文を一つの発話に結びつけることができる形態素のクラスをさす. 前者には (25) の *car* があり、後者には (26) の *pour que* がある.

(25) Max a démissionné *car* les journaux parlent de lui. (Charolles, p. 152)

(26) Max a démissionné *pour que* les journaux parlent de lui. (同上)

2.2.1. テスト

接続構造がどちらの性格をもつかは、次のテストによって知ることができる.

a. 副詞による修飾. opérateurs のみが可能にできる.

(25a) *Max a démissionné *uniquement car* les journaux parlent de lui.

(26a) Max a démissionné *uniquement pour que* les journaux parlent de lui.

b. *c'est que* による外置 (焦点化). 連結構造のみが可能である.

(25b) **C'est car* les journaux parlent de lui *que* Max a démissionné.

(26b) *C'est pour que* les journaux parlent de lui *que* Max a démissionné.

c. 否定（や疑問）. *opérateurs* と *connecteurs* が異なる分布を示す.

(25c) Max *n'a pas démissionné car* les journaux parlent de lui.

この文では先行節 p « a démissionné » が必ず否定され「辞職しなかった. というのは……」という解釈になる. こういう場合, *car* は *connecteur* と言える.

(26c) Max *n'a pas démissionné pour que* les journaux parlent de lui.

この文では2つの解釈が可能である. 1 : p のみを否定（上と同じ解釈）. 2 : 関係 R のみを否定（目的関係を否定し「～するために……したのではない」と解釈する）. この場合, *pour que* は *opérateur* である.

この否定や疑問の対象にならない p は, 主張ではなく前提である.

d. « *Vque* »¹⁰⁾の後の埋め込み *enchâssement*. これも両者の違いを引き出す.

(25d) Sophie *pense que* Max a démissionné *car* les journaux parlent de lui.

この文では先行節 p « a démissionné » のみが思考 *penser que* の対象となる. この場合, *car* は *connecteur* と言える.

(26d) Sophie *pense que* Max a démissionné *pour que* les journaux parlent de lui.

この文では2つの解釈が可能である. 1 : p, q 両方が思考の対象となる. 2 : p のみが思考の対象となる.

e. 時制. これによって従位接続詞の従位的価値の程度をテストできる (Molinié, 1991, p. 108). 例えば,

(27) 様態の *de sorte que* (+直説法) は, より等位的. 従位性がより低い.

(28) 結果の *de sorte que* (+接続法) は, より従位的. 等位性がより低い.

ただし, これらのテストは決定的な結論をもたらすものではない (Charolles, 同, p. 155). 例えば, « *vu que* » は, (29)(30) のように, 等位的な性格を見せる.

(29) **C'est vu que ... que ...*

(30) **... uniquement vu que ...*

他方 (31) においては, 否定の作用域は *vu que* の前まででとまり, 従位性が低い.

(31) Pierre ne viendra pas *vu que* Marie est invitée.

しかし, 論争的な発話では, *vu que* 節までも否定することがあり, 従位的となる.

- (32) Je n'irai pas à l'école *vu que* j'ai envie d'y aller (mais vu qu'il faut que tu y ailles).

2.3. repérage dissymétrique / repérage anaphorique

Fuchs et al. (1979) は、意味的等位を repérage anaphorique、意味的従位を repérage dissymétrique と名付けている。詳細は、同書および (青井 1983)。

3. 統語的・機能的分類および語用論的分類を併用する

以上のように、等位接続詞・従位接続詞にせよ、等位構造・連結構造にせよ、一つの接続詞をどちらかに分類することは難しい。この観点から、筆者はこれまでさまざまな接続詞について、その両面を見出そうと試みてきた。

3.1. 等位接続詞の従位的な使用

3.1.1. et, ou, ni

Ducrot (1972)、石野 (1983) は、節と節の緊密度という観点から、伝統的な等位接続詞 et, ou, ni に、連結構造の文が見られることを指摘した。例えば、「et A et B」, « ou A ou B », « ni A ni B » というパターンは緊密度が高く、2つの要素 (節) がペアとして提示されている可能性が高い。詳細は、上記文献を参照せよ。

3.1.2. car ... et que ...

石野 (1987) は、等位接続詞 car の従位的な性質が見られる例を提示した。一般に car は次のような等位的性質をもっている：

1. 前置できない。

(33) **Car* discipliné, je suis libre. (Mounin, 1972)

2. car 節の独立性が高く、2つの発話行為が継起する現象と考え易い。

(34) *Pauvre Dickie, que de tourments pour une malheureuse petite fille qui est méchante, bête, orgueilleuse, coquette... Car je suis tout cela, n'est-ce pas ?* (Maurois, 1928)

3. その結果、car 節は焦点化できない。先行節の否定のスコープに入らない。

(35) *C'est car les journaux parlent de lui que Max a démissionné. (=25b)

(36) Il n'a pas réussi car il n'a jamais rien fait. (Pinchon, 1986)

では、car 節を列挙したいときはどうしたらよいだろうか。

これは単に一つの文として car の代わりに et で続けられるのが普通である。

(37) Je prends mon manteau, car il fait froid, et il pourrait bien pleuvoir. (Dupré, 1972)

ところが次のように car が et que で言い直されている例が報告されている。

(38) Dénonciation d'ailleurs mystérieuse ; car elle a l'air de venir de l'entourage de Mme Brandon *et qu'*elle semble vouloir innocenter celle-ci. (E. Jaloux) (Georgin, 1952)

(39) Ils reburent car le soleil tapait *et qu'*il fallait s'en fichier plein la tripe. (La Varende) (Georgin) (Pinchon, 1986)

Georgin は、同時代の作家たちのこの誤用を憂えているわけだが、使い手の意識次第で、等位接続詞が従位として捕えうることを示すよい例である。

3.2. 従位接続詞の等位的な使用

car と好対照をなす従位接続詞の *parce que* にも、等位的な用法が見られる。

(40) a. Pierre ne viendra pas aujourd'hui, parce qu'il est malade.

b. Parce qu'il est malade, Pierre ne viendra pas aujourd'hui.

c. C'est parce qu'il est malade que Pierre ne viendra pas aujourd'hui.

(40') a. Pierre ne viendra pas aujourd'hui, parce qu'on me l'a dit.

b. ?Parce qu'on me l'a dit, Pierre ne viendra pas aujourd'hui.

c. ?C'est parce qu'on me l'a dit que Pierre ne viendra pas aujourd'hui.

(40') の *parce que* 節は、前置しにくい (40' b), 焦点化できない (40' c) など、上記の 1 ~ 3 の等位接続詞の性質によく当てはまる (cf. Sakahara, 1993).

4. 従位接続詞の等位的な用法とその意味

4.1. 意味・ニュアンスにほとんど変化のない場合

§3.2 で見たように、*parce que* には、緊密度の低い、等位的な用法が見られ

るが、「理由」という実質的な意味には大きな変化は感じられない。

4.2. 意味・ニュアンスにやや変化がある場合

それに対し、意味やニュアンスの違いが感じられる接続詞がある。

4.2.1. *quand*

(41) J'ai fait sa connaissance *quand* il vivait dans le quartier. (Borillo)

(42) Et j'étais vraiment très heureux *quand* soudain, lundi dernier, tout craque.
(Maupassant) (TLF)

(41)は従位的な用法である。それに対し、(42)は「私は本当にとても幸せだった。そんなとき突然、先週の月曜日に、すべてがだめになるのだった」と訳すのが自然で、「?先週の月曜日、突然すべてがだめになるとき、私は本当にとても幸せだった。」とすると論理的に不自然になる。(cf. 青井 1983a, 1983b, 1986)

しかしながら、*quand*の基本的意味が2つあるとは考えにくい¹¹⁾。「すると突然」のような意味は、*quand*の「同時性」が緊密度の低い使い方によって生じさせるニュアンスだと考えるべきである。緊密度が低く、2つの発言を順次行っているように提出するため、時間のずれが感じられるのである。

4.2.2. *alors que*

*alors que*は「～なのに対して、一方……」というように対立関係を表す。また、時間の表現から形成されたため、同時的な対立を表す。

(43) *Alors que* je me préparais à sortir, mes amis sont arrivés! (Ruquet)

それに対し、次の例は、後節に独立節として置かれている。

(44) Les hommes croient que les machines travaillent pour eux. *Alors que* ce sont eux, désormais, qui travaillent pour elles. (Robbe-Grillet)

(44)は「人間達は、機械が自分達のために働いているのだと思っていた。ところが、今や、彼らこそが機械のために働いているのだ」と解釈できる。ここでは対立節（後節）を前置することは、ニュアンスを変えてしまう。これは等位接続詞と同様の働きをしている。詳細は石野（2012）を参照せよ。

4.2.3. bien que

- (45) *Bien qu'il ait plus de soixante-quatorze ans, M. Dupont fait encore de la bicyclette.* (Loiseau)

上は譲歩の表現であるが、次の例は、譲歩ではない。

- (46) – Je sais, tu aimerais mieux une fille pauvre.
– Oui, j'aimerais mieux que ce soit une fille pauvre. *Bien que* vraiment ce n'est pas tout à fait ce que j'avais rêvé pour toi. (Iordanskaja)

訳：分かっているわ、あなた、貧しい娘の方がいいんでしょう。— うん、貧しい娘だともっといいと思うよ。でも本当に、それは君に対して私が思い描いていたこととはちょっと違うだけ。

後置された節は、先行節（主節）にかかる付属品（従節、状況補語節）ではなく、自立性を持つ節（または文）であり、等位的に追加された文となっている。

4.3. 意味・ニュアンスに変化がある場合

4.3.1. de sorte que

この表現は、次のように2つの用法があることは、§2.2.1. で述べた。

de sorte que + 接続法（→目的・様態「……するように」）

de sorte que + 直説法（→結果「その結果、したがって」）

- (47a) Il l'a bien placé de sorte qu'il puisse l'atteindre.

訳：それに手がとどくことができるように、彼はそれをちゃんと置いた。

- (48a) Il l'a bien placé de sorte qu'il peut l'atteindre.

訳：それをちゃんと置いたので（その結果）、彼はそこに手がとどくことができる。

(47a) は倒置可能で、従位的なのに対し、(48a) は de sorte que 節をこのままで前置することはできず (48b)、等位的な特徴を示す。

- (47b) De sorte qu'il puisse l'atteindre, il l'a bien placé.

- (48b) *De sorte qu'il peut l'atteindre, il l'a bien placé.

他方, *de sorte que* 節の前にポーズを置くと, 目的を表す (47c) は言いにくくなるが, 結果を表す (48c) は問題なく言える.

(47c) ?Il l'a bien placé, *de sorte qu'il puisse l'atteindre*.

(48c) Il l'a bien placé, *de sorte qu'il peut l'atteindre*.

このように (47a) は従位性が強い. 接続法が含意する非実現性が, 節の自立性を低め, 主節への依存性を高めた結果, 2つの節の緊密度が高くなったのである.

他方, (48a) は, 直説法が現実性の高さを示し, 後節の自立性を高め, 主節への従属性が低められているため, 従位接続詞のように前置ができない. この意味で, 等位性が強く, 2節の緊密度が低いと言える.

とはいえ, ここでも, 基本的意味は一つだと考える. すなわち, 「目的 (+ 様態)」の意味を基本とし, 節の緊密度をゆるめ, 前節との分離が感じさせることにより, 「結果」の意味 (ニュアンス) を生じさせるのである.

4.3.2. *au lieu que*

ここでも上と同様の現象が見られる.

au lieu que + 接続法 (→ 否定的様態 「～せずに」「～のかわりに」「～どころか」)

au lieu que + 直説法 (→ 対立 「～であるのに」)

(49) *Au lieu qu'elle vienne, j'ai reçu une lettre.*

訳: 彼女は来ず (その代わりに), 僕は一通の手紙を受け取った.

(50) *Cet employé était consciencieux, au lieu que son remplaçant est négligeant.*

(Hanse)

訳: あの社員はまじめだったのに, 今度かわりに来たやつは怠け者だ.

« *au lieu que* + 接続法 » は, 節内の内容が実現しない (しなかった) というニュアンスが強く, 「～せずに」「～するかわりに」「～どころか」という意味になる. また *au lieu que* 節が前置されることが多い. 緊密性が高く, 従位的である.

他方, « *au lieu que* + 直説法 [条件法] » では, 節の内容を事実とみなしている可能性が高く, その結果, 「～であるのに」というように, 対立の意味が出てくる. 後置されることが多く, 等位性が高い.

4.4. 多義的接続詞

接続詞の中には、*si* や *sans que* などのように、いくつもの意味をもつものがある。このような接続詞では、等位構造や連結構造はどのようになっているのだろうか。以下、*si* について、上記のテストを用いて検証してみる。

4.4.1. *si* の多義性

辞書を見ると、*si* の項目には、いわゆる仮定・条件の意味の他、様々な意味が並んでいるが、節の接続という点から代表的なものは次のようなものである。

- (51) 仮定・条件：S'il fait beau demain, j'irai à la mer.
- (52) 仮定・条件：S'il faisait beau demain, j'irais à la mer.
- (53) 対比：Si la Cité est le cœur de Paris, le quartier latin en est l'âme. (Ducrot)
- (54) 対立：S'il a de l'esprit, il n'a (en revanche) guère de cœur. (Ducrot)
- (55) 譲歩：Si je suis ta femme, je ne suis pas ton esclave. (Stage)
- (56) 理由：Si Pierre est parti, c'est qu'on l'a mal reçu. (Soutet)

(51)(52)の仮定・条件の用法を「もし」系とすると、(53)–(56)は「非–もし」系ということが出来る。以下、各用法について上記のテストを用い、違いを検証する。

4.4.2. *si* と等位性テスト¹²⁾

ここでは、とくに節の倒置と焦点化のテストを試みた。

4.4.2.1. 「もし」系（仮定・条件）

- (51) a. S'il fait beau demain, j'irai à la mer.
- b. 倒置 J'irai à la mer s'il fait beau demain.
- c. 焦点化 (?)C'est s'il fait beau demain que j'irai à la mer.
- c'. 焦点化2 C'est seulement/éventuellement s'il fait beau demain que j'irai à la mer.

(51c)の焦点化では、文脈がないとやや不自然なニュアンスが感じられるが、(51c')のようにすると、問題なく言える。最小必要条件の意味になり、焦点化(強調)する意味が増すためだと思われる。(52c, c')でも同様である。

- (52) a. S'il faisait beau demain, j'irais à la mer.
- b. 倒置 J'irais à la mer s'il faisait beau demain.

- b'. 倒置 2 J'irais bien/volontiers à la mer s'il faisait beau demain.
- c. 焦点化 (?)C'est s'il faisait beau demain que j'irais à la mer.
- c'. 焦点化 2 C'est seulement/éventuellement s'il faisait beau demain que j'irais à la mer.

4.4.2.2. 「非—もし」系

対比：

- (53) a. Si la Cité est le cœur de Paris, le quartier latin en est l'âme.
- b. 倒置 *?Le quartier latin en est l'âme si la Cité est le cœur de Paris.
- c. 焦点化 *C'est si la Cité est le cœur de Paris que le quartier latin en est l'âme.

(53b) の判断は個人差があるが、si の前にポーズ (,) を入れるとより受容性が高まる。cf. (54b')

対立：

- (54) a. S'il a de l'esprit, il n'a (en revanche) guère de cœur.
- b. 倒置 *?Il n'a guère de cœur s'il a de l'esprit.
- b'. (ポーズ) Il n'a guère de cœur, s'il a de l'esprit.
- c. 焦点化 *C'est s'il a de l'esprit qu'il n'a (en revanche) guère de cœur.

譲歩：

- (55) a. Si je suis ta femme, je ne suis pas ton esclave.
- b. 倒置 *Je ne suis pas ton esclave si je suis ta femme.
- c. 焦点化 *C'est si je suis ta femme que je ne suis pas ton esclave.

(55b, c) は、si 節が「条件」の解釈なら受容可能となる。次のように帰結節を未来形にすると、譲歩の意味は消え、条件の意味となるため、すべて受容可能となる。

- (55') a. Si je suis ta femme, je ne serai pas ton esclave.
- b. Je ne serai pas ton esclave si je suis ta femme ?
- c. C'est si je suis ta femme que je ne serai pas ton esclave.

理由 (si ... c'est que)：

- (56) a. Si Pierre est parti, c'est qu'on l'a mal reçu.
 b. 倒置 *?C'est qu'on l'a mal reçu, si Pierre est parti.
 b'. *C'est qu'on l'a mal reçu si Pierre est parti.
 c. 焦点化 *C'est si Pierre est parti que c'est qu'on l'a mal reçu.

このように、「非—もし」系の用法は、倒置がしにくく、焦点化ができないという点で、等位性の高さを感じられ、緊密性が低いことは明らかである。ただし、si 節が前にある方が等位構造である点が、一般の等位接続詞とは異なる。

4.4.3. ゆるい「もし」

仮定・条件の中には、論理性の低い「ゆるい」用法が見られることがある。

- (57) Si tu as besoin d'argent, Pierre cherche un interprète de français.

訳：もしお金が必要なら、ピエールが通訳を探している。

- (58) Si tu veux venir, tu as le droit.

訳：来たければ、君には権利がある。

- (59) Si tu as soif, il y a de la bière au frigidaire.

訳：のどが渴いているのなら、冷蔵庫にビールがある。

これら (57)–(59) に上のテストを適用してみる。

- (57) a. Si tu as besoin d'argent, Pierre cherche un interprète de français.

- b. 倒置 *Pierre cherche un interprète de français si tu as besoin d'argent.

- b'. 倒置 2 (?) Pierre cherche un interprète de français, si tu as besoin d'argent.

- c. 焦点化 *C'est si tu as besoin d'argent que Pierre cherche un interprète de français.

- (58) a. Si tu veux venir, tu as le droit.

- b. 倒置 ?*Tu as le droit si tu veux venir.

- b'. 倒置 2 ?Tu as le droit, si tu veux venir.

- b''. Tu as le droit de venir si tu veux venir.

- b'''. Tu as le droit, alors si tu veux venir, tu peux ...

- c. 焦点化 *C'est si tu veux venir que tu as le droit.
 (59) a. Si tu as soif, il y a de la bière au frigidaire.
 b. 倒置 (?Il y a de la bière au frigidaire si tu as soif.
 b'. 倒置2 Il y a de la bière au frigidaire, si tu as soif.
 c. 焦点化 *C'est si tu as soif qu'il y a de la bière au frigidaire.

これらはいずれも焦点化がしにくく、倒置すると不自然に感じられるものが多いという意味で「非—もし」系に似ており、等位性が高いと言える。

しかしながら、「非—もし」系の si とはやや異なる面も感じられる。それは、倒置した場合に、その受容性にばらつきが見られることである。つまり、(59b, b')では、ややくだけた感じになるものの、ほとんど受容度に問題がない。

また、(58b'', b''')のように、言葉を補うことで論理の修復が可能である。これは「非—もし」系で倒置の多くが意味不明になるのとは異なるところである。

4.4.4. ゆるい「もし」(意味の変化があまりない等位的用法)の考え方

このゆるい「もし」の用法を、Sakahara (1993, p. 21)は疑似条件文 pseudo-conditionnelle と呼び、次のように説明している。例えば、(60)は、(60')のような文が省略されたものだという。

- (60) Si tu as chaud, il y a de la bière dans le frigo. (Sakahara, 同, p. 18)

訳：暑かったら、冷蔵庫にビールがある。

- (60') Si tu as chaud, tu peux prendre de la bière, parce qu'il y en a dans le frigo.

(Sakahara, 同上)

訳：暑かったら、ビールを飲んでいいよ、冷蔵庫にビールがあるから。

すなわち、(60)の帰結文「冷蔵庫にビールがある」は、(60')のように、「ビールを飲んでいい」という帰結文を省略し、その根拠となる理由節を帰結文として残したものである。そのため、通常の場合とは論理関係が異なり、ややずれていると感じられる。

通常の場合では、両節を否定しても論理関係はそのまま成立することが多い。

- (61) S'il fait beau, on sortira.

- (61') S'il ne fait pas beau, on ne sortira pas.

それに対し、疑似条件文では、論理が破たんする。

(60) Si tu as chaud, il y a de la bière dans le frigo.

(60') #Si tu n'as pas chaud, il n'y a pas de bière dans le frigo.

訳：#暑くなかったら、冷蔵庫にビールはない。

このように、疑似条件文は、論理のずれがあるために、2つの節の緊密度が低く感じられ、一見、等位的な様相を見せる。

4.5. si のまとめ

以上のように、「もし」系の si は2節の緊密度の高い、連結構造を形成しており、仮定・条件－帰結というきっちりとした論理性を持っている。それに対し、「非－もし」系の si は緊密度が低く、論理関係よりも、前節をテーマとして、後節でコメントするという等位構造を持っていると言える。他方、「ゆるい」si は、仮定・条件の論理関係を主張しながら、2節の関係はゆるい緊密度をもつという、中間的な構造だと考えられる。

(62) 「もし」の si －連結構造 opérateur 的
 「非－もし」の si －等位構造 connecteur 的

(63) opérateurs ←-----→ connecteurs
 連結構造 等位構造
 高い緊密度 低い緊密度
 「もし」 ゆるい「もし」 非「もし」
 (前置・後置) (前置・後置) (前置)

このように、si を用いた接続では、仮説という論理的な意味が弱くなると、むしろ「ある事柄を事実として確認した上で、それを話題として提示する」標識としての機能が強くなる。そして後続く節は、その si によって提供された話題に対するコメントになる。そのコメントの内容によって、その前にある si 節の内容が、対比、対立、譲歩といったさまざまなニュアンスを帯びること

になるというわけである。

5. 結論：接続詞の意味とニュアンス

両義的な接続詞では、その意味〔ニュアンス〕を連結か等位かという二者択一の図式として捉えることが可能な場合が多い。

しかし多義的接続詞の場合、その意味・ニュアンスは、連結か等位かという二者択一構造ではなく、各用法（意味・ニュアンス）が連結性⇔等位性の間のどちら寄りかという傾向と考えるべきである。

その場合、連結的か等位的かは、節間の緊密度と言い換えることもできる。すなわち、連結構造は緊密度が高く、等位構造は緊密度が低い。

多義〔両義〕的接続詞の場合、その意味・ニュアンスの分離・派生の仕方について2つの考え方ができる。

1. 一方の緊密度（例えば高い方）の意味を基本的意味として、他方（例えば低い方）の場合にいろいろなニュアンスを帯びる可能性が生じる。
2. 何らかの基本的な意味（その元になった副詞など）が、緊密度の高い場合と、低い場合とで異なるニュアンスを帯びる。

これらの解釈を生じさせる動機の一つを担うのはグライスの「協調の原則」、*「会話の含意（推意） conversational implicature」*、Sperber & Wilson の「関連性の原則」であると考えられる。

注

- 1) 本論文は、日本フランス語学会例会（於慶應義塾大学、2009年12月5日）の発表の一部をもとに、修正したものである。
- 2) *Résumé* のフランス語のチェックを Cl. Lévi Alvares, E. Antier 両氏にお願いした。お礼を申し上げる。
- 3) 伝統的にフランス語の等位接続詞とされるのは、*et, ou, ni, mais, car, or, donc* の7つである。
- 4) 従位接続詞はかなり数が多い。*quand, même quand, auand (bien) même* といったヴァリエーションをどう数えるかなどの問題があり、数の特定は難しいが、100以上という。(Gadet, 1992, 98)

- 5) 並置文にも等位的な性質（意味的等位）と従位的な性質（意味的従位）をもつものがあることについては、石野（1999）で扱った。
- 6) その根拠として、意味面からは、等位にも従位にも原因や結果、譲歩などを表すものがあること（Mounin, 1974）（HH, 同上）、形態面からは、不変化語であること（Mounin, 1974）（HH, 同上）、分布構造面から、等位も従位もしばしば接続する同形式の節の間の同位置を占めること（Mounin, 同上）（HH, 同上）などが挙げられている。
- 7) 文の受容性判断については、文頭の「*」は「受容不可能」を、「?」は「完全に受容不可能ではないが疑問あり」を、「#」は「論理的におかしい」ことを示す。
- 8) 具体的な説明はないが、(20)の *puisque* は *car* と、(21)の *quoique* は *mais* と置換可能ということだと考えられる。
- 9) 類似の観点による分類としては、*repérage dissymétrique / repérage anaphorique* (Fuchs & Léonard, 1979)がある。それぞれ意味的従位／意味的等位に対応する。これを応用した *quand* の分析は青井（1983）がある。
- 10) *Vque* は、Bally のいう *modus* にあたる。主に思考や判断を意味する主節表現をさす。
- 11) 記憶の負担や、記述の簡潔性などが、その理由として考えられる。
- 12) 以下の例文については、G. Kawai, Th. Maré, R. Rolland-Piègue の各氏に全般を（K氏には数年を経て2度）チェックしていただき、一部については、さらにその他数人のフランス人にも見ていただいた。各氏にお礼を申し上げる。

Bibliographie

- Antoine, G. 1958/62. *La coordination en français*. 2 vols. Paris : Ed. d'Arthey.
- Bally, C. 1932. 1965 (4e éd.). *Linguistique générale et linguistique française*. Berne : Francke.
- Béchade, H.-D. 1986. *Syntaxe du français moderne et contemporain*. Paris : P. U. F.
- Charaudeau, P. 1992. *Grammaire du sens et de l'expression*. Paris : Hachette.
- Charolles, M. 1990. "Connecteurs et portée : l'exemple de « se figurer que »." *Le discours*. (Charolles et als., éd.) Nancy: P. U. de Nancy. pp. 147-166.
- Chuilon, C. 1986. *Grammaire pratique. Le français de A à Z*. Paris : Hatier.
- Ducrot, O. 1972. *Dire et ne pas dire. Principes de sémantiques linguistiques*. Paris : Hermann.
- Ducrot, O. 1978. "Deux mais." *Cahier de linguistique*, 8. pp. 109-20.
- Ducrot, O. 1981. "Argumentation par autorité." *L'argumentation*. Lyon : P. U. de Lyon. pp. 9-27.
- Ducrot, O. et al. 1975. = Groupe λ-I. 1975.
- Ducrot, O. et al. 1980. *Les mots du discours*. Paris : Minuit.
- Dupré, P. 1972. *Encyclopédie du bon français dans l'usage contemporain*. Paris : Trévise. 3 vols.

- Fuchs & Léonard. 1979. *Vers une théorie des aspects. Les systèmes du français et de l'anglais*. Paris / La Haye / New York : Mouton.
- Fuchs, C. 1992. "Les subordonnées introduites par encore que en français." *Subordination*. (Chuquet & Roulland, dir.) pp. 89–110.
- Gadet, F. 1992. *Le français populaire*. Paris : P. U. F. (Que sais-je? 1172).
- Georgin, R. 1952. *Guide de langue française*. Paris : André Bonne.
- Grieve, J. 1996. *A Dictionary of Contemporary French Connectors*. London : Routledge.
- Groupe λ-1. 1975. "Car, parce que, puisque." *Revue romane*, 10–2. pp. 258–280.
- Hamon, A. 1987. *Guide de grammaire*. Paris : Hachette. (Marabout)
- Hobaek Haff, M. 1987. *Coordonnants et éléments coordonnés*. Paris : Didier Erudition / Norvège : Solum Forlag. (= HH)
- Jordanskaja, L. 1993. "Pour une description lexicographique des conjonctions du français contemporain." *Le français moderne*. 61–2. pp. 159–190.
- Lakoff, R. 1971. "If's, and's, and but's about conjunction." *Studies in Linguistic Semantics*. (Fillmore & Langendoen, ed.) pp. 115–149.
- Léard, J.-M. 1987. "La syntaxe et la classification des conditionnelles et des concessives." *Le français moderne*, 55–3/4. pp. 158–173.
- Lorian. 1964. *L'expresison de l'hypothèse en français moderne : antéposition et postposition*. Paris : Minard.
- Lorian, A. 1966. *L'ordre des propositions dans la phrase française contemporaine. La cause*. Paris : Klincksieck.
- Mahmoudian. 1976. *Pour enseigner le français*. Paris : P. U. F.
- Martin, R. 1976. *Inférence, antonymie et paraphrase*. Paris : Klincksieck.
- Molinié. 1991. *Le français moderne*. Paris : P. U. F. (Que sais-je? 392).
- Morel, M.-A. 1983. "Caractères syntaxiques distinctifs de deux types de concession en français contemporain." *L'expression de la concession*. (éd. Valentin) L'univ. de Paris IV. pp. 41–57.
- Mounin, G. 1974. "Le problème des critères d'analyse dans la description linguistique fonctionnelle : la coordination." *De la théorie linguistique à l'enseignement de la langue*. éd. J, Martinet. Paris : P. U. F. pp. 191–220.
- Pinchon, J. 1981. "Juxtaposition et coordination." *Le français dans le monde*, 159. pp. 52–53.
- Pinchon, J. 1986. *Morphosyntaxe du français*. Paris : Hachette.
- Pottier, B. 1962. *Systématique des éléments de relation*. Paris : Klincksieck.
- Ruppli, M. 1990. "L'opposition car/parce que." *L'information grammaticale*. 46. pp. 22–25.
- Ruquet & Quoy-Bodin. 1988. *Raisonnement à la française*. (Comment dire ?) Paris : Clé

- International.
- Sakahara, S. 1993. “L’inférence pragmatique et le lexique : le cas du pseudo-usage.” *Lexique et inférence(s)*. (Ed. Tyvaert, J.-E.) pp. 17–32.
- Soutet, O. 1989. *Syntaxe du français*. Paris : P. U. F. (Que sais-je? 984)
- Stage, L. 1991. « Analyse syntaxique et sémantique de la conjonction si dans les propositions factuelles. » *Revue Romane*, 26–2. pp. 163–205.
- (Sujet spécial) 1990. “La coordinatin.” (par L. Sznajder.) *L’information grammaticale*, 46.
- 青井明 1983a 「« Quand ～ » と 「～とき」について」『日仏語の対照言語学的研究論集』(川本茂雄編) pp. 9–20.
- 青井明 1983b 「日本語とフランス語のテンスとアスペクト—「～とき」と« Quand ～ »の場合—」『Annual Reports 8』(国際基督教大学) pp. 15–29.
- 青井明 1986 「とき、と／Quand の語彙的対応について」『日仏語の基本語彙の対照言語学的研究論集』(野元菊雄編) pp. 19–36.
- 石野好一 1981 「接続詞の表現 en effet, en fait について」『Les lettres françaises 1』上智大仏語仏文学会 pp. 26–33.
- 石野好一 1983a 「等位接続詞 et, ou, ni について」『サピエンチア (英知大学論叢) 17』pp. 167–86.
- 石野好一 1983b 「フランス語意味論—Argumentation と接続詞—」『海外言語学情報 2』太田・ロボ編 大修館書店 pp. 181–189.
- 石野好一 1984 「等位接続詞 or —接続表現の意味記述へ向けて—」『フランス語学研究 18』pp. 57–69.
- 石野好一 1987 「car... et que... の構文」『フランス語学研究 21』pp. 76–77.
- 石野好一 1988 「フランス語の接続表現と文連結の緊密性について」『サピエンチア 第 22 号』(英知大学論叢) pp. 199–209.
- 石野好一 1993～1994 「戦略としての接続表現—続・ファジーなフランス語—1～12」(連載)『ふらんす』1993年4月～1994年3月 (68–4～69–3) 白水社
- 石野好一 1999 「フランス語の並置構造について」『人文学報』第304号(東京都立大学人文学部) 1999年3月2日 pp. 167–192.
- 石野好一 2012 「対立の接続詞 Tandis que, Alors que, Pendant que の意味と用法について」『川口順二退官記念論文集』(喜田浩平編) (http://web.keio.jp/~kida/hommage_kawaguchi.pdf) pp. 55–59.
- 石野好一 2013 「et の対立, mais の対立」『フランス語学研究第47号』(日本フランス語学会) pp. 37–43.
- 川本茂雄 (編) 1982 『フランス語統辞法』 白水社

- 坂原茂 1985 『日常言語の推論 (認知科学選書2)』東京大学出版会
- 曾我祐典 1992 『フランス語における状況の表現法—構文・動詞叙法の選択—』白水社
- 林和夫編 1957 『前置詞・接続詞 (フランス語学文庫10)』白水社
- 南館英孝・石野好一 1990/1994 『フランス語を読むために』白水社